

探訪 北の風景 56

「九人の乙女」最後の声受信

猿払電話交換所跡・宗谷管内猿払村

青木和弘

時、真岡局にいた交換手は12人で、3人が救出されていたことも分かっているが、なぜ9人が死を選んだのか、まだ謎が多いとされる。

日露戦争後、南樺太が日本領になったのは1905年(明治38年)。豊富な森林資源と良質な石炭、豊かな漁場があつて移住が進み、終戦前には人口が約40万人に達し、物資の欠乏もなく住民の暮らしは豊で活気があつた。

1934年(昭和9年)に、北海道―樺太間に海底ケーブルが敷かれ、本州と電話が通じるようになる。このとき、海底地形や海流の調査で、北海道側のケーブル入口に選ばれたのが、猿払村。猿払電話中継所が新設され、樺太と、北海道や本州との通話や電報を中継した。

海底ケーブルは、南樺太の深海村女麗(ふかみむらめれい)・プリゴドノエ)までの162・8キロメートル。南樺太の主要な郵便局に電話中継所が設けられて電話網が整備されていた。真岡郵便局もその一つだった。

猿払電話中継所は1964年(昭和39年)に役割を終えたが、この年、稚内市出身の歌手・島山みどりが「氷雪の門」(星野哲朗作詞、市川昭介作曲)で、真岡郵便局の9人の乙女の悲劇を歌って、この事件が広く知れわたった。その前年、樺太を遠望する稚内公園に、「九人の乙女の碑」と、樺太慰霊碑の「氷雪の門」像が建立されていたの



稚内港を見下ろしサハリン(樺太)を望む稚内公園にある「九人の乙女の碑」。その横には樺太慰霊碑の「氷雪の門」像がある

だ。厚生省の資料によると、樺太の終戦時の戦闘による民間人の犠牲者は、魚雷攻撃で沈没した緊急疎開船の死者行方不明者を合わせて約37000人。そのうち人口約2万人の真岡の死者は約1000人だった。

樺太との電気通信ゆかりの地、猿払電話中継所跡は2006年(平成18年)、猿払ライオンズクラブ設立20周年記念事業で整備された。寄贈文に「殉職した九人の乙女の霊を慰め、また電気通信ゆかりの地に電気通信の功績を顕彰すると共に世界の恒久平和を祈り…」とある。

宗谷管内猿払村の人口は2777人(11月1日現在)。地理的な条件から宿命的にロシアとの接触の多い地域で、江戸時代後期から幕府の北辺警備で巡視が行われている。

「皆さん、これが最後です。さようなら。さようなら」。1945年(昭和20年)8月20日、南樺太の西岸にある真岡(まおか)郵便局の電話交換手9人は、ソ連軍の侵攻で銃弾が庁舎に飛び込み、砲弾が周囲で炸裂する危険にさらされながらも交換台に向かい続け、ついに最後の発信を残し、青酸カリを飲んで自決した。この9人の乙女たちの最後のメッセージを猿払(さるふつ)電話中継所が受信していた。

ポツダム宣言を受けた日本の無条件降伏から5日後のこの日も、樺太や千島列島では日ソ間の戦闘は続いていた。その後の関係者の証言から、当



浜猿払漁港の西、海王食品の側の道路沿いに、終戦まで樺太との電話回線の中継を行っていた猿払電話中継所の跡地がある。使用された海底ケーブル5本が、透明なプラスチックの筒の中に展示されている。このマンホールの下から南樺太の深海村女麗までの162.8キロメートルが敷設された



オホーツク海を臨む道の駅さるぶつ公園の海側にある「インディギルカ号遭難慰霊碑」。毎年、住民らによる慰霊が行われてきたが、現在は献花台が置かれて簡素に続けられている

1939年（昭和14年）12月12日の旧ソ連の貨客船インディギルカ号遭難事故では、猿払村の住民総出で救出にあたり、子どもを含め429人を助けたが700人以上が死亡したとされる。それ以降、同村では毎年、慰霊が行われ、71年には慰霊碑を建てている。

東西冷戦下の53年に海上保安庁船との銃撃戦になったラスエズノイ号事件。83年の大韓航空機撃墜事件など、国際緊張の前線であることを思い知らされる出来事が住民の心を重くさせている。同村は現在、サハリン州南部のオジョールスキイ村（人口1785人・樺太大泊郡長浜村）と友好姉妹都市を結び交流を重ねている。北方四島を抱える根室管内と同様に目の前は国境の海。こども、日口平和条約の早期締結が強く望まれる地域である。